

強迫性格の特徴および内的世界の理解に関する研究

—質問紙とロールシャッハ・テストを用いて—

22009FRM 小川 星奈

キーワード：強迫性格，ロールシャッハ・テスト，大学生

Ⅰ. 問題と目的

昨今、新型コロナウイルス感染症の感染対策として、除菌や手洗いの徹底が強く叫ばれる中、強迫症を引き起こしたり、増悪したりする可能性があると考えられている（日本精神神経学会，2020）。強迫症とは、強迫観念と強迫行為の存在によって特徴づけられる精神疾患である（APA，2013 高橋監訳 2014）。

また、強迫症は強迫性格の土台の上に生じやすいとの考えも存在する（Freud，1908 懸田・吉村訳 1969）。強迫性格は、摂食障害、抑うつ、アパシー、不登校など、必ずしも強迫現象を伴うわけではなく精神的な不健康にある人々と関連があるということも述べられている（笠原，1976；笠原，1988；下坂，1997）。このように強迫性格と精神的な不健康との関連が指摘されている一方で、強迫的な性格は勤勉性、距離感のある人間関係、自己意識の高さなど、近代社会を生きる私たちにとっては、暗黙のうちに求められる態度であるとも言える（関山，2008）。

強迫症患者に対してロールシャッハ・テストを実施している研究はあるが（富田他，2008）、強迫性格の数十名にロールシャッハ・テストを実施し、各群におけるロールシャッハ・テスト反応の傾向を解釈している研究は見られない。しかし、強迫性格者の特徴や内的世界を理解するためには、強迫性格者の無意識的な側面についても明らかにする必要があると考えられる。不登校やうつ病、アパシーなどを示す青年達の多くには強迫性格が見られるとされており（中島，2003）、強迫性格と青年期は関係していると考えられるため、本研究では、大学生を対象とする。

本研究では、質問紙調査で強迫性格であると考えられる者のロールシャッハ・テストの特徴を明らかにすることを目的とする。悪い方向へ

進むと強迫症の発症に繋がる可能性があると考えられている（Salzman，1973 成田・笠原訳 1998）強迫性格について理解することは、臨床群への理解に役立てることが出来るという点で意義があると考えられる。

仮説としては、強迫性格と考えられる人のロールシャッハ・テストの特徴として、反応数が多く、「W：M」の比率では W の方が高くなるのではないかと推測する。また、思考・言語カテゴリーの、「(4) OBSESSIVE & CIRCUMSTANTIAL RESPONSE (強迫的な反応・ささいな事にとらわれた反応)」(以下、「(4) Obsessive」とする)が多く算出されるのではないかと推測する。

Ⅱ. 方法

1. 質問紙調査

1) 調査対象者と実施方法

A 大学に通う学生 254 名を対象に実施した。大学の講義開始前に質問紙の配布し、翌週の講義終了後に質問紙の回収を行った。

2) 質問紙の構成

質問紙は、事前説明及び研究への同意、同意書控え、強迫性格尺度、フェイスシート、ロールシャッハ・テスト実施に関する依頼書から構成された。①事前説明及び、研究への同意、②強迫性格尺度（関山，2008）：4 因子 20 項目、③研究対象者の情報：学年、年齢、性別、④ロールシャッハ・テスト実施に関する依頼書：依頼文、名前、実施可能日時、メールアドレス

2. ロールシャッハ・テスト

1) 調査対象者と実施方法

強迫性格尺度の平均点を基準に高群と低群に分け、質問紙調査でロールシャッハ・テスト実施を承諾した 16 名（各群 8 名）を対象とし、個別に面接演習室で実施した。

III. 結果

1. 因子分析の結果

関山 (2008) の想定した 4 因子で分析を実施し、関山 (2008) に倣い、第 1 因子を「完全追求」、第 2 因子を「優柔不断」、第 3 因子を「良心性」、第 4 因子を「わがまま」と命名した。

2. ロールシャッハ・テストのスコアの比較

通常の倍以上の反応数を示した 1 名を除外し、15 名分の結果から分析を実施した。反応数、「W:M」の W の割合、「(4) Obsessive」の数に注目し、高群と低群で対応のない *t* 検定を行った。その結果を Table1 に示した。*t* 検定の結果、「(4) Obsessive」のみ、高群と低群で有意差が認められた ($t(8.22) = 3.42, p < .01$)。

Table1
3つのスコアの*t*検定の結果

		N	平均値	標準偏差	<i>t</i>
Tot. R	高群	8	24.00	10.54	-0.18
	低群	7	24.86	8.05	
W:MのWの割合 (%)	高群	8	84.75	13.21	0.23
	低群	7	83.31	10.81	
(4) Obsessive	高群	8	4.00	2.83	3.42**
	低群	7	0.43	0.79	

** $p < .01$

2. 事例研究

強迫性格高群と低群におけるロールシャッハ・テストの違いについて詳細にするため、強迫性格得点の高さと「(4) Obsessive」の数に注目し、各群から 2 名ずつ選別し、形式分析を行い、強迫性格との関連について分析した。その結果、強迫性格高群は、具体的に反応を説明していた。各事例の反応数、「W:M」の W の割合、「(4) Obsessive」のスコアを Table2 に示した。

Table2
各事例のスコア

	Tot. R	W:MのWの割合 (%)	(4) Obsessive
事例A	22	71.4%	7
事例C	32	66.7%	6
事例J	19	66.7%	2
事例M	31	75.0%	0

IV. 考察

1. スコアリングによる比較

強迫性格の高さによる形式分析の結果、思考・言語カテゴリーの「(4) Obsessive」にのみ有意差が認められ、「(4) Obsessive」の数は高群の方が低群よりも有意に多いことが分かった。その他のスコアについては、有意差が認められなかった。これは、本研究の対象者が健常群であり、健常群の中での高低になるため、適応的な範囲内であるためと考えられる。

2. 事例による質的な検討

高群は「(4) Obsessive」の数が多く、説明の仕方も詳細で、丁寧であり、真面目である強迫性格の特徴が表れたと考えられる。Aさんは最後まで反応が明細化されており、説明も具体的であるが、Cさんは途中で火に関する反応を3つ表出した後、強迫的な部分が崩れてしまっていた。このように、高群でも最後まで強迫的に明細化した反応を表出する人もいれば、途中で情緒的な刺激に耐えられなくなる人もいると考えられる。また、Aさんは迷いながら説明している場面が多く、強迫性格により「こだわりすぎて決定が出来ない」という優柔不断な面が表れたと考えられる。低群は、大まかな反応が多く、強迫的ではないと考えられる。詳細な説明をしているように思われる部分もあるが、それは自分の思考を伝えるための表現の仕方が独特で、ユニークなためであると考えられる。

これらのことから、質問紙で強迫性格高群であると考えられた人は、ロールシャッハ・テストを用いた無意識的な面においても強迫的な特徴があると考えられる。しかし、量に対する強迫はなく、反応の仕方や説明の仕方に違いがあり、細かい部分についても説明することへのこだわりであると考えられる。

3. 今後の課題

ロールシャッハ・テストにおいて強迫性格による優柔不断な側面を測定することが可能な指標はない。そのため、強迫性格による優柔不断にも焦点を当てて調査を行うことで、より無意識的な部分を理解することが出来ると考えられる。